

論文要旨

目的：就業看護職者の特性や勤務状況等が、月経随伴症状に影響を及ぼしているかを探る。さらに、どのようなセルフケアを行っているのかを明らかにする。そして月経随伴症状や特性、セルフケア等が仕事に影響を及ぼしているのか探究することを目的とした。

方法：首都圏にある 400 床以上の大学病院または総合病院に勤務する月経のある女性看護職者を対象に自己記入式質問紙を配布し、留め置き法によって回収した。データ収集期間は 2014 年 7 月から同年 8 月であった。測定用具は月経随伴症状尺度日本語版(秋山ら, 1979)、Numerical Rating Scale (NRS)、月経随伴症状による看護業務の支障尺度(本研究で作成)、職業性ストレス簡易調査票(下光ら, 2006)を用いた。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った(承認番号: 14-022)。

結果：分析対象者 646 名の平均年齢は 30.6 歳 (SD7.7) で、8 割弱は交代制勤務の形態で働いていた。月経随伴症状は神経系薬剤(睡眠導入剤・精神安定剤または抗うつ薬)を使用している者の症状が、非使用者と比べ重かった(月経前: $t(644)=3.177, p=0.002$) (月経中: $t(644)=2.848, p=0.005$) (月経後: $t(644)=2.659, p=0.008$)。また月経痛は出産経験のない者が、経験のある者と比べて重く ($t(644)=-4.221, p=0.000$)、婦人科系疾患(子宮筋腫, 子宮内膜症, 卵巣腫瘍)を指摘されたことのある者が、指摘されたことのない者と比べて重かった ($t(644)=2.719, p=0.007$)。月経随伴症状・月経痛に対するセルフケアとして、市販薬を使用する者が多かった。月経随伴症状を理由に勤務変更や業務量調整を希望するかどうかの問いに対し、したいと回答した者は 4 割いたが、実際にそれらをしている者はごく少数であった。月経随伴症状による仕事への支障として、月経中の【身体症状からくる仕事の能率の低下】を訴える者は、他の時期と比べ多かった。特に「頭痛や下腹部痛など体に痛みがあり、体を動かす看護業務が辛い」と回答した者は多く 4 割存在した。また影響の程度は低いですが、月経随伴症状による仕事の支障には、職業性ストレス、時間外労働が正の影響を示し、出産経験、月経随伴症状に対する薬物療法が負の影響を示していた。

結論：月経随伴症状には神経系薬剤の使用、出産経験、婦人科系疾患が影響していた。ケアとして市販薬を使用する者が多数いた。月経随伴症状を理由に勤務変更や業務量調整を希望する者は 4 割いた。多くの就業看護職者は月経中、身体症状により仕事の能率が落ちていた。月経随伴症状による仕事の支障には、月経随伴症状、職業性ストレス、時間外労働が正の影響を示し、出産経験、月経随伴症状に対する薬物療法が負の影響を示していた。